

第213回くらしの植物苑観察会 2016年12月17日(土)

- 近代のサザンカ -

箱田直紀(恵泉女学園大学名誉教授・日本ツバキ協会会長)

生垣や庭などに植えられているサザンカには、桃色や紅色花、花の周囲から紅色のぼかしが入った花などがあり、花形も一重から八重や獅子咲きなど様々ですが、これらの基になった野生サザンカは一重咲きの白花で、四国や九州などの山地に自生します(図1)。

白花サザンカから、どのような経緯で色や形が多様化したのかはあまり明確ではないのですが、自生地周辺や瀬戸内、関西、東海地方から関東にまで花色や花形が変化した古木が現存することから、江戸時代あるいはそれ以前に見つけ出された変わり花が庭に持ち込まれ、さらに相互交雑によって変異が拡大したものと考えられています。



図1 野生サザンカの花

園芸サザンカの発達と継承

サザンカが記録に現れるのは、江戸時代に入ってからです。

1630年代から描かれたツバキの図譜や解説書中にサザンカも載っていますが、ツバキとは特別に区別されなかったようです。しかし、当時の植木産地であった江戸染井(現在の駒込や巣鴨一帯)の園芸家・伊藤伊兵衛一族によって1695(元禄8)年に刊行された「花壇地錦抄」には〈茶山花のるひ〉として50品種が載せられ、1739(元文4)年の「本草花蒔絵」には100品種が図入りで解説されています。

江戸に集められたサザンカは、その後も関西や中部などの品種と相互交流が繰り返され、江戸後期の文化・文政期にはさらに変化に富んだ多数の品種が作出されました(図2~4)。

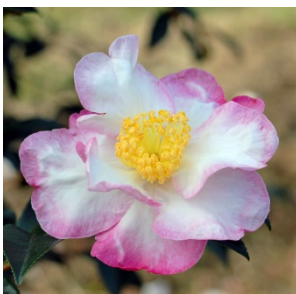


図2 江戸サザンカ・快童丸



図3 江戸サザンカ・七福神

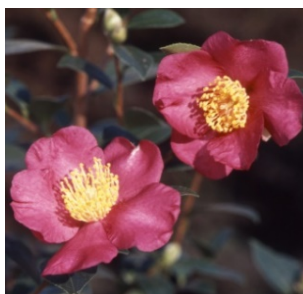


図4 江戸サザンカ・三国紅

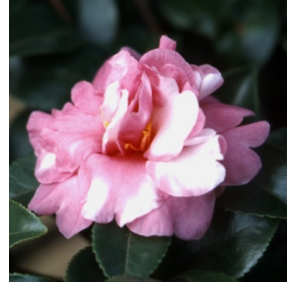
しかし、同じ仲間のツバキの花は春にかけて咲き、花形や花色も変異に富むのに対し、サザンカはどちらかというと、華やかな

ツバキの裏方あるいは添えものとして扱われてきたようです。その理由は、この頃のサザンカの花はほとんどが一重咲きで、散りやすく、初冬の木枯らしの中ではらはらと散る花のイメージが定着していたためでしょう。

その後、幕末から明治にかけての動乱期には多くの品種が失われ、染井の植木産地も消滅して行きましたが、ツバキやサザンカ品種の多くが、埼玉県安行(現川口市)の皆川家に伝えられ、第二次大戦の暗黒時代を経て現在にまで引き継がれています。

新しいサザンカの出現

第二次大戦後のサザンカの増殖や栽培は 1950 年代前半から始まりますが、1960 年頃から晩咲きですが、花が八重になった華やかな新品種が関西の宝塚や池田市の植木産地から紹介され、次いで久留米市など各地の植木産地で増殖されて急激に全国に広まりました (図 5～7)。



その多くが中部原産の獅子頭(関東では寒椿とよぶ: 図 8) という八重咲き品種の系統で、中にはサザンカとツバキの中間的なハルサザンカ (図 9) も

図 5 近代の品種・緋乙女

図 6 近代の品種・昭和の栄

図 7 近代の品種・日の出富士

含まれますが、何れも開花期がやや遅く、12 月から 2～3 月へかけての寒中に咲きます。

現在では、華やかな八重咲きや獅子咲きの品種が好まれるため、植木市やガーデンセンターで売られるサザンカは八重咲きが多くなり、サザンカ全体の開花期も晩秋から冬のほうへと移動した感があります。



図 8 八重咲きの獅子頭

図 9 ハルサザンカ・絞笑顔

その結果、冬枯れの寂しい庭や生垣の片隅でひっそりと咲いてきたサザンカのイメージまで徐々に変化しつつありますが、一方では、一重を中心とした早咲き品種と八重で華やかな冬咲き品種を組み合わせると、晩秋から春先まで継続して花を楽しむことができるようになりました。

海外へ渡ったサザンカ

サザンカが欧州へ渡ったのは 1860 年代後半で、冬が寒い欧州ではほとんど普及しなかったようですが、1940 年代から米国において日本産のサザンカを親にして本格的な育種が始まり、現地で命名された新品種が発表されるようになりました。

この流れは、さらにオーストラリアやニュージーランドにまで拡がり、温暖な気候のもとで、華やかな新品種が次々と生み出されました。その一部は 1960 年代後半頃から日本にも里帰りを始め、サザンカの世界に一層の華やかさを加えています (図 10～13)。



図 10～13 外国生まれのサザンカ (左より) ベティ・パトリシア (米国)、シャンソネット (米国)、ペアトリス・エミリー (オーストラリア)、ジェニファー・スーザン (オーストラリア)

次回予告

第 214 回くらしの植物苑観察会 2017 年 1 月 28 日 (土)

「中世人と植物」(田中 大喜 当館研究部歴史研究系 准教授)

13:30～15:30 (予定) 苑内休憩所集合申込不要